

3月29日「イエスの担った十字架は」コロサイ書2：8~15、ヨハネ福音書12：20~36

「この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」今日イエスはそう教えられます。この言葉に私は戸惑いを覚えます。イエスは私たちの命を、魂を救われた方です。それなのにその方が同時に命を憎めと言うのです！

物語の設定はこうです。いよいよ過ぎこし祭が近づいていました。エルサレムには世界中に散らされたユダヤ人たちが集まってきています。その中にはギリシア人（異邦人）でありながらも、ユダヤ教に尊敬と信頼を置く人々も混じっていました。中には割礼を受ける者たちもいて「改宗者」と呼ばれました。また、そこまではいかなくともユダヤ教を信じ、礼拝や聖書を読んで律法を尊ぶ人々も居て、彼らは「神を畏れる人々」と呼ばれていました。そのような異邦人が居たことに驚く方もおられるかもしれませんが。私たちのユダヤ教のイメージは、強い選民意識もしくは民族意識のゆえに、周囲から反感を買い、閉鎖的に暮らしていたように思えるからです。けれども、一方では律法を守るという宗教的な熱意、また倫理的生活意識の高さから、ユダヤ人以外の人々からも好意と尊敬を得ていたことも知られています。特に、イエスの時代はユダヤ教では一夫一妻制が確立した頃でした。その結婚生活や家庭生活は、必ずしも一夫一妻制ではなかった世の風潮からは目新しく、清く映り、ローマの上流階級の女性たちや奴隷たちのなかに、ユダヤ教へとあこがれを持つものが多数いたことが聖書以外の歴史資料からも知られています。これがキリスト教になると、より新鮮で生命に溢れ喜びをもった「愛の宗教」として広まっていくこととなります。この物語では、このギリシア人（異邦人）たちが弟子たちに仲介されながらイエスへとたどり着きますが、そこには後の教会の歩みが暗示されているように思えます。ユダヤ教に見られた命と愛の源泉がイエスを通してより多くの異邦人たちへと伝えられていくのです。

さて、イエスはそのような場で語られました。最も有名な聖書の言葉の一つでしょう。

「24 節 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」

麦の種は蒔かれずに放置しておかれればそれはいつまでたっても1粒のままです。ところが、地面に蒔かれれば、その一粒の麦自体は死んでしまいますが。芽が出て、多くの実を結ぶことになります。これはもちろん、この後イエスが歩まれる道筋を示しています。イエスがご自身の命を十字架の上で献げることによって多くの人が救われ、永遠の命へと生かされることになるのです。最も深い神の愛、その神秘が明かされます。受難節の今、このことを深く覚えたいと思います。

これらの言葉に続いて、冒頭の言葉が語られます。**「25 節 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る。」**

自分の命を愛する者は失い、逆に命を憎む者が永遠の命を得る・・・もちろんこの言葉も多くの人のためにご自身の命を献げられたイエスを暗示しているでしょう。けれども、この言葉は最初に申し上げたとおり非常に難しい言葉だと思います。そして、その難しさとは裏腹に聖書では繰り返し登場しますので、おそらくイエスは色んなところで語られたのでしょう。

ここでイエスの十字架上での死を英雄視し、それに倣うように語るの簡単です。しかし、それが多くの悲劇を生み出してきたことを私たちは知っているはずで。戦時中の天皇崇拜と特攻隊、イスラム原理主義による自爆テロ、このような英雄的な死というのは国家や紛争に簡単に利用され、人の命を軽く扱うことへと繋がります。私たちは決してそのような物としてイエスの死を考えてはなりません。というのも27節にはこう続いています。「今、私は心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、私をこの時から救ってください』と言おうか。しかし、私はまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」

イエスのはっきりと「心騒ぐ」と言われます。「父よ、私をこの時から救ってくださいと言おうか」とも。そうなんです。イエスはこの犠牲的な死を喜んで受け入れたのではありません。苦しみ、悩み、痛み、恐れ、それでも受け入れられたのです。イエスがゲッセマネの丘で「どうかこの杯

を取り除けてください」と神に祈られたことを私たちは忘れてはならないのです。十字架の上で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか）」と叫ばれたことを忘れてはならないのです。十字架の死は決して軽いものではありません。イエスの死は私たちの命そのものです。その死を軽く扱うことは私たちの命そのものを軽く扱うことなのです。イエスの命の重み、死の痛み、それでも献げることを決意された十字架の決心の重みを私たちは十分に受け止めなければなりません。

けれども、一方である意味で自らを惜しまず献げることが聖書が要求していることを私たちは知らなければなりません。マルコ福音書にはイエスが永遠の命を受け継ぐ方法を聴きに来た金持ちの話があります。律法の掟を守るようにと言われた男は「そういうことは皆、子どもの時から守ってきました」と答えます。するとイエスは彼を慈しんで言われるのです。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」男性は肩を落としてその場を去っていきました。イエスに従うということ、イエスの弟子であることはそうやってこれまでの自分が大切にしてきたもの、命とさえ思えるほど執着してきたものと決別し新しい歩みを始めることなのです。

レントの時期になると、この数年、私は大好きなコーヒーを飲まずに、100円を貯金箱にためて後で献金することにしていました。これは私のゼミの指導教授の真似で、水野先生は必ず甘い物断ちをしていました。何かこれをするによって清くなれるとかってわけではないのですが、執着について考える機会にはなると思っています。皆さんの中にもこれがないと生活出来ないという者がある人がいるのではないのでしょうか？“No music, No Life”とか？お金、名誉、権力、お酒、スマホ、恋愛・・・私たちが執着しているものは本当にそんなに大切なものなのか、それは一度離れてみなければ分かりません。案外無くてもやっていける、何か解放されたような気がするときがあります。今日の言葉も他の聖書翻訳を見ていると「自

分の命に執着する者は、それを失う」となっているものもあります。イエスは何を食べようか、何を着ようかと思ひ悩むな、とも言われます。私たちの思ひ悩みの原因の大半は執着であるように思います。ここでいわれている「命」とは、私たちが執着している”もの“と言えるかもしれません。そういったものから離れ、イエスの教えに従って歩むことを聖書は伝えます。それも私たちが囚われているものから解放されるということだからです。

コロナウイルスの拡散が世界中に不安を引き起こしています。こういったときにこそ、人の本性が垣間見えるとも思えます。ウイルスへの不安から、不必要にほかの人の分まで買い占めたり、アジア人や外国人への差別を煽るような人々もいます。これだけ生活に苦しい人が出てきているのに和牛券で経済対策なんていっている日本の政治家はどうやっても自分の利権から離れられない愚か者だと思います。一方で、自らの感染の危険を抱えながらも懸命に治療に当たる医療スタッフ福祉・行政様々な分野の人々の姿には頭が下がります。確かにそのような人たちのところにこそ永遠の命はあると思わされます。「**25 節 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る。**」非常に難しい言葉のようで、この言葉は確かに真理のことなのです。それは、私たちにどのように生きるかを示してくれるものなのです。

私たちはイエスが歩まれた受難の季節を過ごしています。今一度、イエスは私たちのすべての罪を引き受けて、一人苦難の道を歩まれたことを覚えたいと思います。イエスの担った十字架の重みを受け止めたいと思います。そして、私たちもイエスに従うということは何か大切なものを献げて生きるということです。簡単ではない、けれども永遠の命に至る道へと私たちは招かれているのです！